

「大学生であること」へのポジティブ・イリュージョンに関する研究展望

西田 若葉

A Review of Positive Illusions of "Being a University Student"

Wakaba NISHIDA

概要

本論文では、西田（2020）の大学進学に対する期待感に関する指摘をもとに、進学者や進学を支える保護者等の人々が「大学生であること」へのポジティブ・イリュージョン（大学生PI）を有すると仮定し、その概念の整理と今後の研究に関する展望を行った。大学への期待および全般的なポジティブ・イリュージョンに関する先行研究を踏まえると、大学生PIは「大学での自己」、「大学生活の統制」、「大学卒業時に対する楽観」の3側面が存在すると考えられる。今後の大学生PIに関する研究の課題として、測定尺度の開発や、大学適応との関連、進学者と保護者における相互的な影響に関する実証的検討を行うことがあげられた。

キーワード：ポジティブ・イリュージョン、大学適応、社会的相互作用

Summary

In this paper, based on Nishida's (2020) suggestion about the expectation of going to university, we assume that students and their guarantors have positive illusions of "being a university student" (US-PI). Based on previous research on expectations to university and positive illusions in general, US-PI is thought to have three aspects: "self at university", "control of university life", and "optimism for graduation". Future research on US-PI should include the development of a measurement scale and empirical study about the relationships with adjustment to belonging university and the social interactions between students and their guarantors.

Keywords: positive illusions, university adjustment, social interaction

問題と目的

西田（2020）は、わが国における大学進学者やその保護者等の大学への期待感に関して、先行研究や学生支援の現場での本人の能力の証明や、就職面・経済面・結婚面等での優位性が含まれていることを指摘した。これらは、中央教育審議会（2013; 2014）の提言す

る大学教育のあり方である「これからの時代に求められる能力」を養成した結果として間接的に得られる可能性があり、多くの大学進学者や保護者にとってイメージしやすいメリットであると推測される。しかし、学生支援者側の視点からみた大学入学後の実態は、学校教育と異なる環境へ急速に移行し、学習や対人関係、進路決定といった面より高い自立性や柔軟性を求められるという課題に直面化しやすく、学生の心理的成長を促すと同時に大学入学後の適応感の低下や退却傾向の増加といった心理的危機をもたらす場合がある(鶴田, 2002; 大隅・小塩・小倉・渡邊・大崎・平石, 2013)。本人や保護者等にとって、大学生活の実態は、入学前の準備やサポートだけでは現実検討が困難であり、本人の能力や将来性に関する想定と異なる現実に向き合うことで心理的な成長や危機のきっかけを得ると考えられる。以上により、大学進学者や保護者等の大学、ひいては大学生の立場への移行に対する期待感には、入学前からの現実検討が困難な側面に対する肯定性の高い認知的特性が関連しており、大学での適応性の促進と阻害の両方をもたらす可能性があることが示唆されている。本論文では、このような認知的特性を、「大学生であること」へのポジティブ・イリュージョン(以下、大学生PI)として捉え、その理論的背景を踏まえた具体的内容や、研究方法に関する探索的な検討を行うことを目的とする。

大学生PIの心理学的背景

まず、大学生PIを検討するにあたり、この概念の心理学的な理論上の背景を述べる。

大学生PIは、特に大学進学予定者や在学生、進学を支える保護者等が有すると考えられる「ポジティブ・イリュージョン(positive illusions: PI)」である。Taylor & Brown(1988)は、社会的認知や精神的健康に関する先行研究の概観を通して、精神的健康において正常な人々が、自分自身に関して客観的な現実よりも過剰に肯定的に認識することを指摘し、PIの概念とその精神的健康に対する貢献可能性を提唱した。PIの内容は、1. 自分自身の特性に対する非現実的で肯定的な見解、2. 偶発的要因を含めた状況に対する自分自身の統制可能性の過剰認知、3. 将来の出来事に対する非現実的な楽観主義の3側面が提唱されている。Makridakis & Moleskis(2015)は、人々がPIを有することによる利益と損失に関して、ギャンブル、株式等の市場、起業、予防医学、戦争といった具体的な状況で検討し、個人の心身の健康や社会全体の利益に対する一定の有効性はあるが、甚大な損失を被ってしまう可能性や、自分自身による将来の不確実性の低減および状況の統制が不可能であることを受け入れて行動する重要性を指摘している。このことから、PIは生活上の様々な状況で多くの人々に生じるもので、心身の健康や経済状況、対人関係等における適応性と不適応性の両方をもたらす可能性があると考えられる。

また、先行研究の知見から、PIの表れ方は国や文化によって異なることが指摘されている。(外山・桜井, 2000; 2001; Boucher, 2017を参照)。外山・桜井(2001)は、大学生

や専門学校生を対象に日常生活全般におけるPIを測定し、日本人のPIの傾向を検討した。その結果、欧米では自己の特性や出来事で全般的にPIがみられるのに対し、日本では周囲の他者との協調に重要な特性（誠実性、調和性など）や、一般的にネガティブな出来事（借金や自己破産をしないなど）に関してPIがみられる傾向にあることが明らかにされている。この結果に関して、相互独立的自己観を持つとされる欧米では、特性の種類や出来事のよし悪しを問わずPIが一貫して表出されるのに対し、相互協調的自己観を持つ東アジアでは、自己概念が特定の状況（評価される特定の領域）によって変容するため、多くの日本人にとって一部のPIが際立って測定された可能性があること示唆している。このことから、日本の社会文化的な背景を踏まえたPIの検討を行うためには、全般的なPIだけでなく、特定の立場や状況に置かれた人々における特有のPIの内容や、心理的適応性との関連を検討することが重要である。

以上により、わが国における大学生という立場に対するPIの内容や測定に関して検討することは妥当であり、進学に関する意思決定や入学後の大学生活における適応性との関連を検討することで、学生や保護者の大学入学に関する心理的傾向を考慮した高大連携や学生支援の発展に寄与できると考えられる。

大学生PIの具体的内容

次に、上記の理論的背景や知見ならびに、大学生という立場や大学に対する期待を踏まえ、大学生PIの具体的内容を整理する。

全般的なPIの具体的内容に関しては、外山・桜井（2001）によって作成された質問項目があげられる。この項目は、Taylor & Brown（1988）の提唱に基づき、自分自身の特性に対するPIとしての「自己」、状況に対する自分の統制可能性に対するPIとしての「統制」、自分の将来の出来事に対するPIとしての「楽観主義」の3種類から成り立っており、回答者と同じ所属先の「一般的（平均的）な同性の」人物と比較して評価させる形式である。なお、「統制」と「楽観主義」の項目内容は共通しており、肯定的・否定的な両方の出来事が含まれているが、評価方法が「楽観主義」では将来の自分が他者と比較してどのくらい当てはまるかを評価するのに対し、「統制」では現在の自分が他者と比較してどのくらい「努力（統制）可能」であるかを評価するという点で異なっている。

「大学生であること」特有のPIについて検討する際に、進学前からの大学への期待に関する研究を参考にすることができる。千島・水野（2015）は、在学中の大学生を対象に、入学前の大学生活への期待に関する内容を探索的に検討した。その結果、大学入学前から時間的なゆとり（遊ぶ時間がたくさんある、気楽な大学生活が送れるなど）や人間関係（いろいろな人と関われる、人脈が広がるなど）、学業（興味のある勉強に専念できる、幅広く知識を得るなど）、課外活動（楽しいサークル活動・部活動ができるなど）等に対する期待を有していたことが明らかにされている。また、リクルート進学総研（2019）は、

大学進学予定の高校生を対象に、進学の特典に関する調査を行った。その結果、就職の可能性、将来の出世や収入・結婚や恋愛での有利、学習環境の水準、モラトリアムの享受といった点で、進学の特典を予測していることが明らかにされている。

また、保護者を対象とした研究においても、大学に対して進学者本人と同様の期待を持っていると考えられる。樋口 (2014) は、保護者に対する調査結果から、半数以上が大学で子どもに力を入れてほしいこととして、進路や友人関係、学問に関する項目を選択したことを明らかにした。さらに、保護者の大学に対する価値意識に関して、子どもの将来や社会競争に役立つ実的な価値を期待していることを指摘している。

以上により、大学生PIの具体的内容は、全般的なPIと、大学進学者や保護者の大学進学への期待に関する知見を併せて考慮することで、「大学での自己」、「大学生生活の統制」、「大学卒業時に対する楽観」という3つの側面から成り立つPIとして仮定できる (Table 1)。「大学での自己」は、大学進学によって発揮されることを求められる特性に対するPIを表しており、全般的なPIの項目を、大学環境の特徴や大学進学への期待に適合させた内容となっている。「大学生生活の統制」は、在学中の出来事に対するPIを表しており、主に学業や課外活動、生活上の取り組みに対する自身の統制可能性を問うことが可能な内容となっている。「大学卒業時に対する楽観」は、卒業や進路決定、自立といった、多くの大学生が卒業時期において到達することを求められる出来事に対するPIを表している。

大学生PIの研究に関する今後の展望と課題

最後に、大学生PIの研究に関する展望と課題に関して、以下の3つの観点から述べる。

測定尺度の開発および信頼性・妥当性の検証 PIに関する実証的な先行研究では、主に質問紙調査による検討が行われている。使用されている項目は、外山・桜井 (2001) のようにPIの直接的な測定を試みたものだけでなく、自己高揚研究の一環としてPIの側面 (自己) のみが測定されたもの (伊藤, 1999) や、PI以外 (自己原因性や楽観主義のみ) に関する研究のために作成された尺度からそれぞれ引用して検討されたもの (Lee & Chung, 2008) がある。しかし、PI全体として、尺度の妥当性や信頼性を検討した研究はみられない。この問題は、PIをより適切に測定し、実証的検討を行うために重要である。今後、大学生PIに関しても、Table 1における3側面の内容に沿った質問項目を作成すると共に、尺度としての信頼性および妥当性の検討を行うことが重要であると考えられる。

大学環境における適応性との関連の実証的検討 Taylor & Brown (1988) は先行研究の知見をもとに、PIが精神的に健康的な多くの人々において常に存在する現象であり、幸福感や他人を気遣う能力、創造性や生産性のある作業能力といった指標を促進すると述べている。また、日本人を対象とした実証的研究においても、PIが高いほど精神的健康の指標が高い傾向にあることが報告されている (外山・桜井, 2000; 森谷・大山・堀毛, 2000)。しかしその一方で、社会的コンピテンスに対するPIが高い児童はそうでない児童

Table 1. 大学生PIの具体的内容と基盤となる先行研究

	大学生PIの内容（具体例）	全般的なPIの項目例 （外山・桜井，2001）	参考とした先行研究（具体例）
自己	大学での自己：大学生になることで発揮することを求められる能力や特性に対するPI（学力が高い，教員や学生に対して社会的である，授業や課外活動に対して積極的である，計画を立てて行動するなど）	社会的である，積極的である，思いやりがある，まじめである，頭の回転が速い（社交性，経験への開放性，調和性，誠実性等の下位項目として提唱）	外山・桜井（2001）の項目を，大学環境の特徴や進学への期待に適合させている。
統制	大学生生活の統制：大学生生活において生じうる出来事に関する本人の統制可能性に対するPI（良い成績を取る，健康を維持する，希望の資格を取得する，友人ができる，好きなことに自由に取り組む，余裕のある大学生生活を送れるなど）	長生きする，就職がうまくいく，幸せな結婚生活を送る，大金を手に入れる（全体の内容は楽観主義と共通しており，ここでは肯定的な出来事を抜粋）	<ul style="list-style-type: none"> 千島・水野（2015）が提唱した，大学における時間的なゆとり（遊ぶ時間がたくさんあるなど），人間関係（いろいろな人と関われるなど），学業（興味のある勉強に専念できるなど），課外活動（楽しいサークル活動・部活動ができるなど）等に対する期待 樋口（2014）が指摘した，保護者が子どもに大学で力を入れてほしいと思っている内容（将来の進路や生き方を考える，学部の専門的な勉強，友達との交流や対話など）
楽観主義	大学卒業時に対する楽観：卒業時期において，多くの大学生に求められる出来事の達成に対するPI（留年しない，進路を確定させる，第1志望の進路に進む，生活面や経済面で自立する，進路先でうまくいく，周囲に認められるなど）	将来癌になる，将来離婚する，将来仕事を解雇される，将来借金をしたり自己破産をしたりする（全体の内容は統制と共通しており，ここでは否定的な出来事を抜粋）	<ul style="list-style-type: none"> リクルート進学総研（2019）が調査した，大学進学者が考える進学のメリット（有名企業や大手企業に就職できる可能性が高くなる，出世に有利である，恋愛や結婚するときに何かとプラスになるなど） 樋口（2014）が指摘した，保護者の大学に対する価値意識（子どもの将来の投資になる，本人に能力があることの証明になる，社会で活躍するための実力がつくなど）

に比べ，他者評定による攻撃性が高いという結果から，PIが特に客観的な他者の視点からみると必ずしも適応的であるとは限らないことが指摘されている（外山・桜井，2008）。さらに，大学進学者の適応性に関する実証的研究の結果から，入学前の期待と入学後の実態とのギャップが心理的ストレスの増加や大学生生活への意欲の低下につながるものが指摘されている（千島・水野，2015；原田・池谷，2019）。これらの知見から，今後の研究では，進学者本人における大学生PIと大学における適応性との関連についてより幅広い視点から検討を行うことが重要であると考えられる。具体的には，大学生PIや適応性の

主観的な評定だけでなく、大学における実態（学業成績や進路状況など）や、大学の友人およびチューターを担当する教員の他者評定を用いることで、客観的な本人の適応状態による検討が可能であると考えられる。さらに、入学前から入学後にかけて縦断調査を行うことで、大学生PIと実際の大学環境に対する認知の相互的な影響に関する検討が可能となることが考えられる。

大学進学者と保護者における社会的相互作用との関連に関する実証的検討 Taylor & Brown (1988) は、PIが抑うつや意欲低下が生じると予想される逆境的な状況下で特に機能すると述べており、その理由に関して、人々がお互いに自己に関する否定的なフィードバックを受け取らないよう社会的関係を構築し、受け取った場合でもその状況下での肯定的な側面や以前から自分自身で納得している側面に焦点を当てることで、PIを維持しようとする傾向にあることを取り上げている。このような社会的相互作用を有する関係性は、お互いの特性を比較的多く知っていると考えられる大学進学者と保護者等の多くにあてはまる可能性がある。進学者や保護者は、樋口 (2014) やリクルート進学総研 (2019) の調査結果が示すように、大学に進学することで本人にとって成果があるという期待を有していることから、大学進学に関する肯定的なフィードバックを相互に表出、受容することで、両者ともPIを維持するかもしれない。今後の研究では両者のペアデータを用いることで、大学生PIと社会的相互作用との関連や、大学における心理的危機にある際の機能に関する検討を行うことが重要であると考えられる。

参考・引用文献

- Boucher, C. H. (2017). Positive Illusions. In V. Zeigler-Hill, T. K. Shackelford (Ed.), *Encyclopedia of Personality and Individual Differences*. Springer Nature Switzerland AG, <https://doi.org/10.1007/978-3-319-28099-8>
- 千島雄太・水野雅之 (2015). 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響——文系学部の新入生を対象として—— *教育心理学研究*, 63 (3), 228-241.
- 中央教育審議会 (2013). 高大接続特別部会及び高等学校教育部会の検討課題に関する主な論点
文部科学省ホームページ https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/attach/1342736.htm (2020年12月27日)
- 中央教育審議会 (2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）（中教審第177号）文部科学省ホームページ
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf (2020年12月27日)
- 原田新・池谷航介 (2019). 「大1コンフュージョン」の実際（第3報）——ライフスキル、意欲低下、心理的ストレス反応との関連—— *岡山大学教師教育開発センター紀要*, 9, 243-250.

- 樋口健 (2014). 高大接続の課題に迫る——第1回 保護者の大学へのニーズはどこにあるのか?——VIEW21大学版2014年度, 3, 15-19.
- 伊藤忠弘 (1999). 社会的比較における自己高揚傾向——平均以上効果の検討—— 心理学研究, 70 (5), 367-374.
- Lee, Y. J., & Chung, Y. H. (2008). Positive Illusion of Exemplary Altruists. *Asia Pacific Education Review*, 9 (2), 94-100.
- Makridakis, S., & Moleskis, A. (2015). The Costs and Benefits of Positive Illusions. *Frontiers in Psychology*, 30, <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.00859>
- 森谷静・大山正博・堀毛裕子 (2000). Positive Illusionと精神的健康の関係 日本性格心理学会発表論文集, 9, 44-45.
- 西田若葉 (2020). 大学入学への幻想的な期待感と入学後の心理的適応に関する一考察——大学現場の実際及びポジティブ・イリュージョンの観点から—— 宮崎産業経営大学研究紀要, 30 (2), 15-23.
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二 (2013). 大学新入生の 大学適応に及ぼす影響要因の検討——第1志望か否か, 合格可能性, 仲間志向に注目して—— 青年心理学研究, 24(2), 125-136.
- リクルート進学総研 (2019). 高校生の進路選択に関する調査 (進学センサス2019) <http://souken.shingakunet.com/research/2019sennsas4.pdf> (2020年12月26日)
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: a social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103 (2), 193-210.
- 外山美樹・桜井茂男 (2000). 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48 (4), 454-461.
- 外山美樹・桜井茂男 (2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72 (4), 329-335.
- 鶴田和美 (2002). 大学生とアイデンティティ形成の問題 臨床心理学, 2 (6), 725-730.